

【資料：児玉三夫】

『児玉三夫対談集 ～教育の源流を求めて～』（1987年）

対談テーマ：「大学図書館と稀覯書」

対談者：児玉三夫（明星大学学長）

鱈坂二夫（甲南女子大学学長・京都大学名誉教授）

アジア初のトマス・モア章受章¹

鱈坂二夫 今日、遠いところおいで頂きありがとうございます。私も何回か明星大学にはおじゃましていますが、いつも色々な点で、啓発されています。特に図書館は、実に世界的に著名な図書をたくさん集められました。まずシェイクスピア、それと東京リンカーンセンターにはリンカーンの資料が六千点以上ありますし、またイギリスの労働党機関誌²が全部そろっています。今回、児玉学長がトマス・モア章という、収集家としては最高の榮譽を意味するメダルをもらい、それに行かれたということをお聞きしましたので、そのことをまじえてお話を伺いたいと思います。

児玉 鱈坂先生から明星大学のシェイクスピアとか、エイブラハム・リンカーンとか、またイギリスの労働党の機関誌について褒めて頂き大変光榮に存じます。こちらの甲南女子大学でも随分珍しいコレクションをお持ちのようでございますし、大学のライブラリーも大変なものだと伺っております。

先ほどトマス・モア・メダルのことをおっしゃいましたが、実は私もまったくの意外でした。昨年の秋でしたでしょうか、私どもが加盟している「図書を愛好する会」³というのがございまして、この会がトマス・モア・メダルを中心にヨーロッパあるいはアメリカの本を愛好する、まあ貢献された方を表彰するサンフランシスコ大学のグリーンソン・ライブラリーのアソシエイトが協会で、欧米から有名なコレクターを表彰するという、年に一回なんです。今回はヨーロッパ、アメリカだけでなくアジアから、該当者を選んだらどうかという委員の発言があったという。それでどういふ方が良いかと言ったら、私の名前が出たというのですね、相当数の委員から。つまりトマス・モア・メダルというのは、個人の収集家を中心にして、大学の関係であれば、図書館の収集にも貢献しているというような、一番はプライベートコレクションというものを対象にしているというお話でしたが、「あなたの場合はペスタロッチの収集」と「合わせて大学の図書館として有名なシェイクスピアとかあるいはまたリンカーンの収集でアメリカ合衆国以外では一番充実している。また努力されているので当然対象になる」⁴というお話がありまして、受章の対象になったわけですね。

ところが受章するだけでなく、メダルをもらう前に、講演を行えという、講演も英語で。そこで、シェイクスピアと、リンカーンのコレクションと、そして個人のものでペスタロッチのコレクションと、そのシェイクスピアとリンカーンとの話を述べ、最後にペスタロッチについてのコレクションで苦労したことや、色々な方と収集を通してご懇意になったことをお話しました。

また、何か記念にと思って講演のパンフレットと、ペスタロッチの有名な『隠者の夕暮』の復刻版⁵をさし上げました。

トマス・モア章は個人のコレクションと、しかしやがては公共の貢献につながるという、そういう主旨のメダルでございます。東洋からは初めてであったと言いますから大変恥ずかしいような気がいたしますが。

鱈坂 いや、それは大きな出来事です。特に図書館のことを中心に考えますと本当に良かったですね。トマス・モア章はおそらく知らない人が多いと思いますが、やはり個人のコレクションが同時に公共・大学を含めて役に立つ

そういう方に年に世界中で一人に差し上げる、そして、東洋で初めて明星大学の児玉学長がもらわれたという、これは本当に喜ばしいことだと思いますが、集められるに際し、ご苦労話があると思いますが、その辺をつけ加えて頂いたら、なお良いのじゃないかと思いますが。

学問的感動をよび起こす稀覯書

児玉 鱒坂先生の学校も立派なコレクションをされていますから、共通する点もあるかも知れませんが、私は大学の図書館がどういう図書館であるべきか、それぞれ事情があってなかなかこうだということは言い難いのですが、大学の図書館というのは、学問のためのレア・ブックスですね、普通の本と違うそういう価値のあるものを備えるべきじゃないかと、こういう考えをもっております。

鱒坂 例えば、初版ものとか、それからサイン入りとかいうものを、何か贅沢なものを集めているように思う人がいらっしやるけれども、そうではなしに、やはり自らサインした、たとえば、ヘルマン・ヘッセ⁶がこう書いているというのをみて、ページをめくったときに、受ける感激というのは違うと思います。

児玉 鱒坂先生が、そうおっしゃることに私も同じように感じます。やはり原本というもの、オリジナルを手にしたときの、その感慨というものはちょっと、例えようのない素晴らしいものですね。本を収集するというのは、大変な労力と余裕と費用を要するものだということがお互いによくわかっているかと思います。

それほど苦労して本を集める、集めた本をだんだんと整えていくということが大学にとっても図書館にとっても大事なことだと思います。明星大学の図書館では、そういう努力をしています。

鱒坂 それは良いことですね、それがなくちゃいけない。

児玉 収集についての苦労と申しますと、先程申しましたペスタロッチの文献の幾つかを手にしたときの思い出がございます。その中でも特に西ドイツとそれからスイスですね。一部フランス、イギリスあたりにあるんですが、特にチューリッヒのヘルムト・シューマンという本屋さん⁷などは、いまだにずっと手紙のやりとりをしています。

鱒坂 本が呼ぶのですね、本の方から呼びかけてくる。

書物との運命的なめぐりあわせ

児玉 ある時、本屋さんの奥の薄暗い棚に、一冊は装丁ができていてあとの三冊はペーパーみたいな四冊の本がありました。『リーンハルト・ゲルトルート』⁸と書いてある。これは一八〇一年に最初で、一八〇七年まで二年おきに四冊出ているんですが、ペスタロッチの教育のロマンを書いた『リーンハルトとゲルトルート』の初版ものです。いや嬉しかった。

二版、三版は手に入るのです、三版はペスタロッチの生存中の唯一の全集と言われるコッタ版の、第一巻から第四巻にそれが載っているんです。あるいは第三版ですね、私第一版、二版、三版、四版まで持っていますが、やはり分量がちょっと違う。多かったり少なかったりで、まあ苦労はしますけれども本当に素晴らしいと思います。

鱒坂 私の所では大変珍しいという「ヘルマン・ヘッセ」があります。昨年八月に皇太子と皇太子妃殿下がお出でになってご覧頂いたのですが、妃殿下が、ヘッセの所にじっと立っておられ、教官に盛んにお聞きになっていました。時間がないので侍従の方は「早く早く」と言っておられるのですが、本当にご熱心に、ヘッセの詩集をご覧になって大変これは珍しいとおっしゃるので後でコピーしたものをお届けしました。

私にも古書にまつわる大変な思い出があります。昭和二十五年頃だったでしょうか。京都大学に来た間もなく石原君という私の三、四年後輩の方で、当時和歌山大学の教育学の先生をしている方ですが、リット⁹の翻訳をしたいけ

れども自分が持っているのは新しい版なので、戦前の古い版が手に入らないでしょうか、突き合わせてやりたいというところで見えたものだから「私が持っていますよ、お送りします」といって送ったんです。四、五日経ったら手紙が来まして、「あの本は私の本で、応召出征するときに売って良い本と、売って悪い本と分けて置いたが、家の者が間違えて売ってはならない方の本を売ってしまった」と。その本は私が、九州大学に行ったときに大学の正門の前の古本屋に寄り、ひょっと見たらリットがあったものだから、それを買ってさっと読んで所有者のサインがあったんだけど、これは見ないで自分の本棚に入れて置いた。つまり売った本が古本屋を通して博多の九州大学の前の古本屋に行ってお店の所に来て、これを彼に送ったというわけです。

児玉 本当に素晴らしいお話ですね。

いわき明星大学にマーク・トウェインのコレクション

鯨坂 いわき明星大学に図書館ができて、さまざまな本を入れなければいけない。色々苦労されておられると思いますが、最近そういった珍しい本とかがありましたら伺いたいです。

児玉 おかげ様で認可されてほっとしているところです。いわき明星大学には、理工系四学科と人文系三学科がありますので、学部・学科に関係の深いレア・ブックを少し集めていきたいと思っています。

人文系では、マーク・トウェイン¹⁰の日記とか、その他手紙とか二、八〇〇点のコレクションを手に入れました。これなどはやはり近代英米文学の大事なものの一つじゃないかと、こう思っております。それからドイルの著述とか。

理工系につきましては、アメリカにジェネラル・エレクトロニクスという会社が研究所で使っていたという本がございまして、コレクションが手に入りました。

皆さんから「よくすぐにこういうものが手に入りますね」と言われますが、やはり何でもかんでもという訳にはいきません。大学はやはりその大学が中心にしているような学部とか、学科の関係の深い本を集めていき、だんだんと余裕がでたら広げていくことが非常に大事だと思っています。

日本文学関係とか、そういうものも少しずつ集めているような次第です。鯨坂先生、日本文学で立派なものをお持ちだということですが、あれは何という本ですか。

鯨坂 あれは源氏の写本¹¹です、それから関西に特殊な方がおられて、『曾根崎心中』¹¹がでたとってもってこられる。近松の研究家がいるものですからさっそく持って来ていただきました。ただ和紙は、なかなか虫が出て保存が大変です。

児玉 保存が大変ですからね。私の方も初めて日本文学科というのができたものですから、少しずつそういうものを収集しようと思っています。

特色ある図書館の育成

鯨坂 明星は多くのスタッフと児玉学長の熱心さもあって、建設的に集められる。それは大変良いことだと思います。

今日は大変良いお話を伺って勉強になりました。最後に大学の図書館が本を集める意義、一番のキーポイントを一言学長からお伺いしたいと思います。

児玉 なかなか難問の一つだと思いますけれども、大学というのは特色を持った図書館を育てて行くということが、私は非常に大事なことだと思います。それから、個人の力ではなかなかできないわけで、やはり大勢の学校関係の力に依らなくてははいけません。これからはそういったご援助を得て良いコレクションを持ち、将来の貴重な宝としてやっ

ていかなくてはいけないと思います。

日本は文化国家と言っていますが、残念なのは大学の図書館などに寄付していただく、あるいは図書館だけではなく施設も、色々して下さる方がたに対して、文化政策が本当に乏しいと思うのです。文化国家と言っても国会図書館に、有名なゲーテンベルクのバイブル一つない¹²のですから。もう少しドイツあたりからでもゲーテンベルクのバイブルを分けてもらって、出版の、本の元だと言われるような、印刷技術の元だと言われるような、そういうものもやはり国会図書館あたりで持たなければ文化国家と言えないんじゃないかと思います。

それからもう一つ、私立の大学を初め図書館を援助して下さる有志の方には、免税をして育てて行くことが一番大事な文化政策だと思うのです。アメリカは進んでいますからね、だからぞくぞくと母校に色々なものを寄付しますので、立派な大学になっていますね。

鯨坂 学校に集まったものは決して外に出て行かない。払出ししませんからね。民間だとどこに行くかわからない、本当にそう思いますよ。

児玉 本日は、本当に大事なお話を伺いまして、これからもよろしく申し上げます。

鯨坂 お互いに宜しく、どうも有難うございました。

〔解題〕

『兄玉三夫対談集～教育の源流を求めて～』（1987年）

対談テーマ；「大学図書館と稀覯書」

鯨井俊彦*

兄玉三夫対談「大学図書館と稀覯書」の解題に当たって、1. はじめに 2. 対談の中で話されている内容について脚注を付けた箇所の解説 3. おわりに の順で説明をすすめたい。

1. はじめに

これまで兄玉三夫先生が田尾先生、鯉坂先生などと対談された三つのテーマは、『兄玉三夫対談集——教育の源流を求めて——』の中にすべて収められているものである。そのうち「リーンハルトとゲルトルート——J・H・ペスタロッチのロマンをめぐって」の対談者は田尾一先生であった。これについての解題は『明星大学明星教育センター研究紀要』第4号に収録されている。「大学教育と図書館」の対談者は鯉坂二夫先生であった。上述の『研究紀要』5号に収録。また、「教師をつくる」の対談者も鯉坂二夫先生であった。上述の『研究紀要』第5号に収録。

更に、昭和48年7月28日の「図書新聞」に掲載された記事「コッタ版『ペスタロッチ全集』（全15巻）のもつ品位と価値」（昭和48年7月28日付け）の本文とその解題も上述の『研究紀要』第4号に収録されている。

今回は「大学図書館と稀覯書」（昭和62年・ラジオたんぱでの新春対談）についての解題である。

2. 脚注（1～12）

1. 「サー・トマス・モア・メダル」受賞

兄玉三夫学長は、米国サンフランシスコ大学（USF）のグリーンソン図書館協会から、1986年度「サー・トマス・モア・メダル」を1986年5月4日に授与式があり、同メダルを受賞した。同メダルは、16世紀イギリスの偉大なヒューマニスト、政治家、思想家であり、また理想社会を描いた名著『ユートピア』の著者トマス・モア（Sir Thomas More 1478～1535）の業績に因んで授与されるもので、サンフランシスコ大学が毎年、世界の優れた私的図書収集家一人を選んで贈ってきた。1986年度で第19回目を迎え、兄玉学長が東洋人として初めての受賞になった。サー・トマス・モア・メダルは、1967年にW・モニハン神父によって提案されたもので、同図書館が1951年に初めて入手した特別コレクションが、トマス・モアに関する文献・レアブック



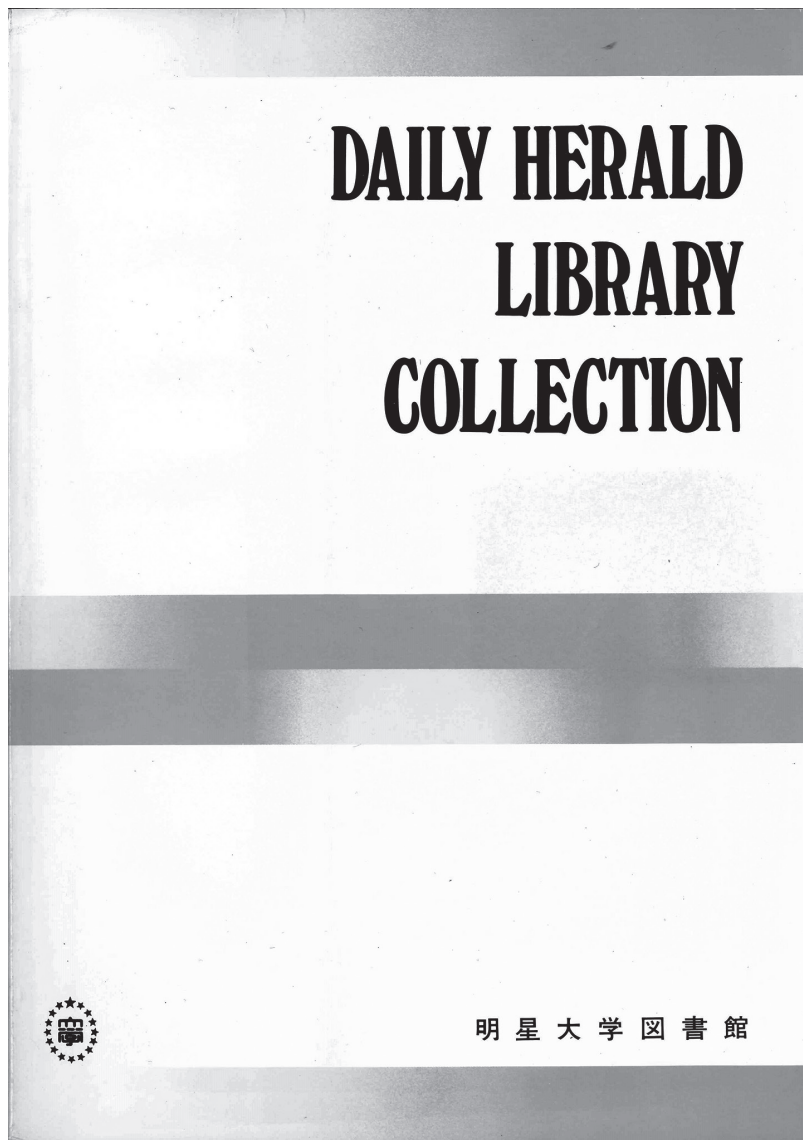
メダルを手にする兄玉三夫学長（右）

* 明星大学名誉教授

スであったところからこれに因んで名づけられたもの。メダル授賞式は、1986年5月4日午後3時からサンフランシスコ大学ユニバーシティセンター・パリーナラウンジに同大学関係者ほか図書収集家約140名が集まり、開催されていたグリーソン図書館協会年次総会の席上で行われた。授賞式の後、児玉学長の受賞記念講演「原典と3人の偉大な歴史的人物、シェイクスピア、リンカーン、ペスタロッチー特にペスタロッチーを中心にして」が約1時間にわたって行われた。3人の世界的人物の著書、資料などを組織的・総合的に収集するについて、学長がさまざまな制約があるなかでいかに情熱を傾けてこられたかをエピソードを交えながら語られた。次いで、W・モニハン神父が壇上に立ち、児玉学長が進み出て、恭しく受け取ると、会場に拍手が大きく響き渡った。メダルは直径125mm、厚さ7mmの円形の青銅のまんなかに、トマス・モアのレリーフ、その周りに「すぐれた個人的な書物の収集、それはまた公共の利益」(Private Book Collecting - A Public Benefit)と彫られているものである。

私は児玉先生が「サー・トマス・モア・メダル」受賞に輝かれたことは、長い間の先生の国際文化交流に尽力してこられた業績が広く世界に認められたものと思って嬉しく感じた。

2・労働党機関紙 (The Daily Herald 創刊 1911.6.25—終刊 1964.9.14)



『デイリー・ヘラルド・ライブラリー コレクション』
カタログ表紙 (明星大学図書館発行)

本学所蔵の「デイリー・ヘラルド・ライブラリー コレクション」(Meisei University, The Daily Herald Library Collection) は 1911 年に労働党機関紙として発刊されて以来、たびたびの資金難にあえぎながらも、働く者のニュース・ソースとして、この分野に金字塔をうちたてたどう新聞の全揃いをはじめ、1964 年 9 月 14 日の廃刊までに同新聞社が蒐集した各種雑誌 (Back Numbers and Serials Books) 20 点、単行本 (Single Books) 2,190 冊、さらにパンフレット (Government Papers and Reports) 約 3 万 5 千点という膨大なコレクションである。

3・「図書を愛好する会」(通称 グロリアクラブという)

①グロリアクラブの由来

フランスの栄光の時代に“グロリア”(グロリエ Jean Grolier de Servieres, 1489?-1565) という貴族がおり、彼は財務大臣を歴任した政治家であると同時に、偉大な愛書家でもあった。彼は文献を集めたり、書誌研究を推進したりと、フランスが文化大国として現在の名声を得るようになった基盤を築いた人の一人といわれている。

②現在、グロリアクラブの本部は、ニューヨークのセントラルパークの近く 60 丁目に 6 階建てのクラシックな建物の中にある。アメリカの出版、図書館界にも大きな影響力を持つクラブとして知られる。

③日本のグロリアクラブは、このニューヨークのクラブを参考に 1974 年、12 人の日本人(児玉先生もそのうちのお一人である)のメンバーが日本にも作ろうと集まったのがきっかけで今日まで続いている。

日本で唯一の愛書家のクラブであるグロリアクラブは、創立以来、内外から著名な書誌学者、収集家、図書館関係者、古書店主、出版社主等を講師としてお迎えし講演会を開催したり、大学図書館、各種資料館、文学館への見学会を実施してきている。

いまでは例会も 96 回を数える。(2015 年現在)

4・ペスタロッチー、シェイクスピア、リンカーン関係資料の内容について

①ペスタロッチーの収集について

以下、児玉先生が収集された『ペスタロッチー』の全集・選集関係の主な文献について取り上げてみたい。(年代順に)

- i. コッタ版『ペスタロッチー全集』(全 15 巻・1819-1826 年刊)
- ii. ザイファルト編 ブランデンブルグ版『ペスタロッチー全集』(全 18 巻・1869-72 年刊)
- iii. リークニッツ版『ペスタロッチー全集』(全 12 巻・1899-1902 年刊)
- iv. ブッヘナウ、シュプランガー、シュテットバッハー編『ペスタロッチー全集』(全 29 巻—以下の巻も刊行予定中・1926 年刊—)
- v. ラッセル版『ペスタロッチー全集』(全 10 巻・1945 年刊／生誕 200 年を記念しての全集)
- vi. マン編『ペスタロッチー選集』(全 4 巻・1869-71 年刊)

上述の 6 点の『全集』・『選集』の中では、iv. に当たるブッヘナウ、シュプランガー、シュテットバッハー編『ペスタロッチー全集』のいわゆる批判版が 20 世紀の決定版であるとの評価があるが、児玉先生はこれら上述の ii. ～vi. までの『全集』や『選集』に比べ、ペスタロッチー生前唯一の『全集』であるコッタ版こそは、たとえ編集上の不備はあるにせよ、全集としての価値はいささかも減ずるものではなく、むしろペスタロッチー没後の諸編に見られる品位と権威を具備している、と最大限の評価をされていた。そして、i. のコッタ版『全集』復刻の意義を次のように述べている。

「このコッタ版『全集』は現在の日本では勿論、ヨーロッパでもなかなか完全揃いを入手することは困難である。

私は機会あってこのコッタ版ペスタロッチャー全集（15巻・1819-1826年刊）完全揃いを二部所蔵しているが、ペスタロッチャー研究には不可欠の原典であり、歴史的価値を有する文献であると考え。今後この原典の復刻版の半数でも保存されれば、後世のペスタロッチャー研究に資すること多大であると思う。」

そして、児玉先生がこのペスタロッチャーのコッタ版『全集』の復刻と併せて、『隠者の夕暮』草稿写真版を含む『ペスタロッチャー参考文献』（全2巻）を編集出版したことは、我が国のみならず、世界のペスタロッチャー運動にとっても、計り知れない貢献であったといえる。

②シェイクスピアの収集について

ここでは、児玉記念図書館とフォルジャー・シェイクスピア図書館の友好親善樹立について触れておきたい。

「明星大学図書館に所蔵されているシェイクスピア・コレクションは、日本はもちろんアジアでも随一とされ、欧米でも高く評価されているが、昭和57年4月、児玉学長が米フォルジャー・シェイクスピア図書館創立50周年記念式典に招待されて以来、シェイクスピア・コレクションを通じて両図書館の関係はいっそう緊密化されてきた。この親善関係を正式に具現するため、双方で種々打ち合わせた結果、同図書館稀観書収集部長エリザベス・ニーマイヤー女史の来学を仰ぐこととなった。こうして、昭和58年11月3日の文化の日、本学図書館において友好親善樹立の記念式とニーマイヤー女史の記念講演およびシェイクスピア・コレクションの展示が行われ、児玉学長とニーマイヤー女史のあいだに「友好親善楯」が交換された。



IN MOST SINCERE FRIENDSHIP
FROM
THE FOLGER SHAKESPEARE LIBRARY
TO
PRESIDENT KODAMA
AND THE STAFF OF MEISEI UNIVERSITY

ON MEISEI'S 60th ANNIVERSARY
AND THE OCCASION OF
THE VISIT OF ELIZABETH NIEMYER,
ACQUISITIONS LIBRARIAN
OF THE FOLGER LIBRARY,
NOVEMBER 3, 1983

IN RECOGNITION OF
A DISTINGUISHED PAST,
IN CONFIDENCE OF
AN EQUALLY DISTINGUISHED FUTURE,
AND IN HOPE OF FUTURE COOPERATION
BETWEEN OUR TWO INSTITUTIONS.

O.B. Herdison
DIRECTOR
FOLGER SHAKESPEARE LIBRARY

フォルジャー・シェイクスピア図書館と交換された「友好親善楯」

③リンカーンの収集について

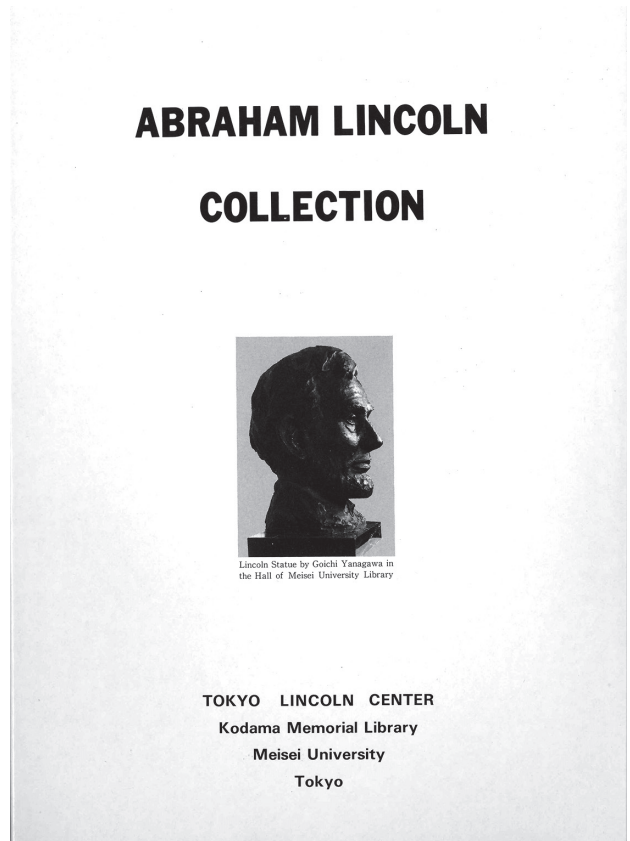
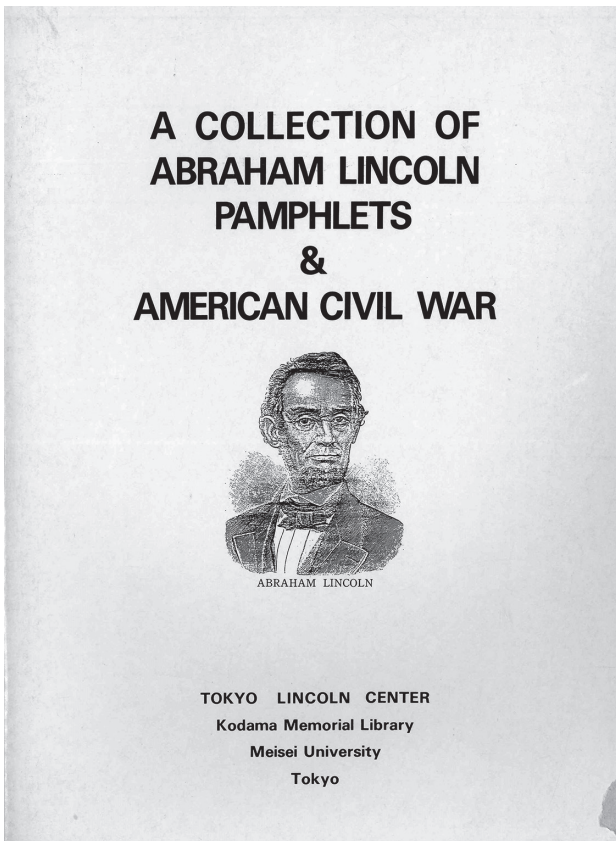
①「明星大学東京リンカーン・センター」（1982〔昭和57〕年）開所の経緯と収集について

アメリカの第16代大統領エイブラハム・リンカーン（1809-1865）に関する文献約6,000点を蒐集した図書館では、リンカーンの生誕173年目に当たる1982（昭和57）年2月12日に「明星大学東京リンカーン・センター」の開所式を挙げる。

当日は、アメリカ大使館文化担当官シドニー・ハモルスキー氏、日本芸術院院長有光次郎氏の祝辞があり、児玉学

長より東京リンカーン・センターの創立者である望月政治氏へ感謝状が贈呈された。同センターに所蔵されている蔵書の核となった約2,000点の資料群は、日本出版貿易（株）の創立者である望月政治氏（1885～1990）の3度目の蒐集によるものである。望月氏は15歳で渡米、1909（明治42）年のリンカーン生誕百年祭に遭遇したのがきっかけとなり、蒐集を始めたが、買い集めた数十冊の図書を、1923（大正12）年の関東大震災で焼失してしまった。数年後に再び蒐集を決意し、かなりの数量に達していたが、それがまた1945（昭和20）年の東京空襲によって灰燼に帰してしまっ。それにもめげず、3度目の蒐集が1953年の再渡米を機として始められた。その後、高齢のため思うように活動ができないでいた望月氏が、かねてからリンカーンの人格に傾倒するとともに、リンカーン研究がひいては真にアメリカ理解につながることを洞察していた児玉三夫学長に、当時国立国会図書館副館長であった酒井悌氏を通じて紹介され、その結果としてコレクションが1980（昭和55）年の春、本学に委譲されるに至ったのである。

なお、所蔵目録については、1981（昭和56）年に『Abraham Lincoln Collection』として刊行されている。その後蒐集した資料のうち特筆されるべきものとしては、リンカーン自筆の原稿、リンカーンの肖像写真、そのほか図書・雑誌を加えると、約7,000点の所蔵点数になっている。



『Abraham Lincoln Collection』カタログ表紙（Vol.1 と Vol.2）

5・『隠者の夕暮』（草案）の復刻

『隠者の夕暮』の草案はファイルヘンフェルト編の校訂版全集第一巻で初めて印刷に付されて世に現われたものである。その原本であるペスタロッチの手に成る手稿について、ファイルヘンフェルトは次のように記している。

チューリッヒ図書館所蔵、手稿本について――

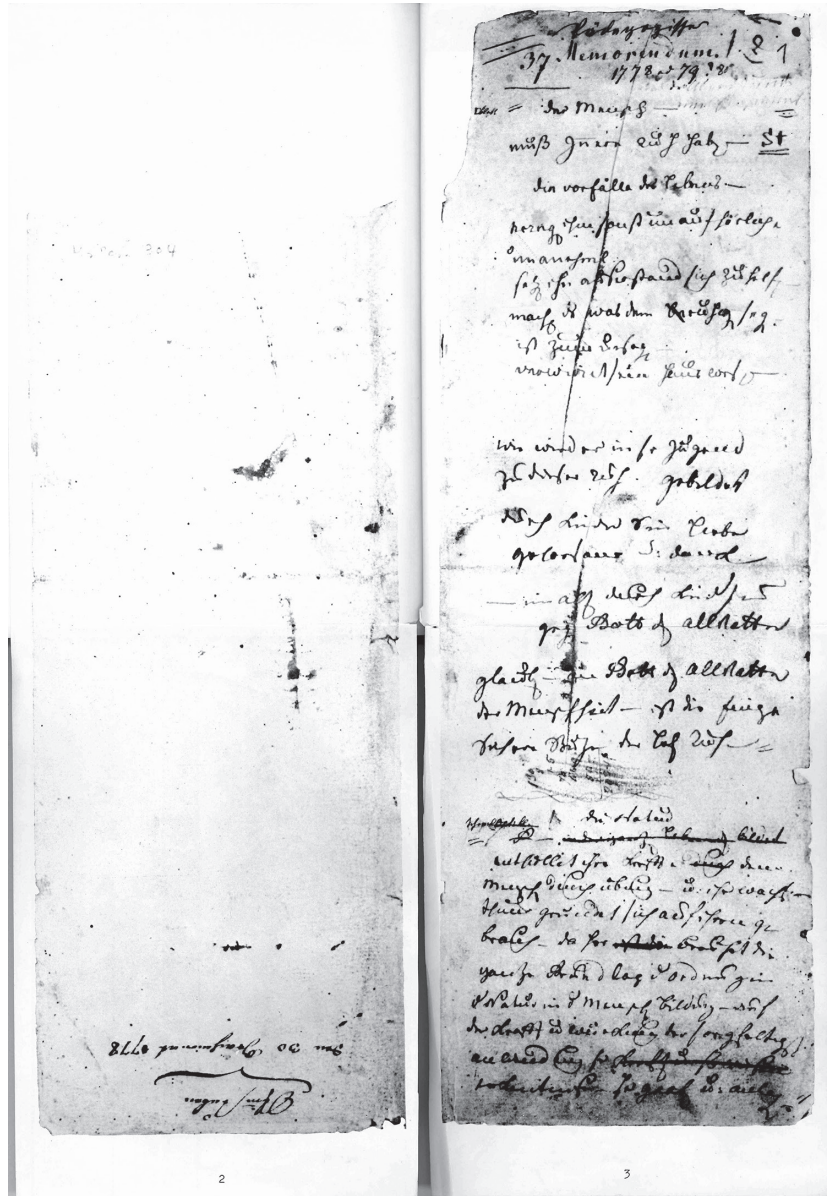
「全紙十二等分紙をさらに二つ割りにして、○皮糸で綴じた、幅のせまい縦長の冊子で、初めの二頁は、これを使う以前にちぎり取られたと思われるもの。その初めの頁にペスタロッチ夫人アンナの筆跡で、紡ぎ場 1778年6月30日、と記してある。第3頁から『ノイホーフ、6月30日、1778年』という見出しの下に、ペスタロッチ夫人の書

いた、1778年7月1日から同年8月30日まで、1779年2月3日から3月26日まで、および同年5月14日から18日までの、ノイホーフの糸紡ぎ作業場の収益簿が記帳されている。それをめくってゆくと、その次の頁から、ペスタロッチ自筆の『隠者の夕暮』の草案が、31頁にわたって現われる。」

ここからも分かるように、この冊子は元来家計簿であったと児玉先生もいつも言っておられた。というのも、家計簿として使う以外は原稿などを書くには不向きな紙の形態であり、ここに書かれた草案は書いては消し、消しては書き入れるというようなやり方で、消したり書き直したりして、ペスタロッチの当時の自分の思想状況を纏めることに苦心さんたんしている後が窺える興味深いものであるという。

だからこの草案は、ここに書かれている計算書よりも後で書かれたものに違いない、とも言っておられた。

ペスタロッチはこの草稿を、1779年5月18日以後、そして多分その日より近い日に書き込んでいることは間違いない。それはこの部分が、5月18日の日付の最後の記帳と同じ黄褐色のインキで書かれていることからその傍証になるだろう、とその理由を挙げて説明されておられた。



『隠者の夕暮』手稿本

6・ヘルマン・ヘッセ・コレクション（甲南女子大学所蔵）

甲南女子大学が所蔵するこのヘルマン・ヘッセ（Hermann Hesse, 1877-1962）コレクションは二人のコレクターおよび蔵書家の所蔵していた資料が基になって構成されたコレクションである。このコレクションの中にはヘッセに関するものが261冊あり、その大半が初版本、ないし限定出版であり、そのほとんどにヘッセ自筆の署名や献辞、あるいは引用文が記されている。たとえば、ヘッセの処女詩集『ロマン的な歌』（Romantische Lieder, Dresden, Leipzig: Pierson 1898 (Titleblatt 1899)）この本のタイトルページには1899とあるが、1898年10月に刊行されているものだという。本書は自費で出版された600部のうち、書評用に贈呈された68部をのぞくと、1900年1月までに売れたのは、仮綴43部を含む54部だった。処女詩集にまとめられた詩も、1902年の『詩集』に幾つかが採録されたほかは、1942年の『詩集』に「1895-1898の詩」として収録されるまで、ながらく埋もれたままであった、というほどの貴重な資料である。また、ヘッセが最初に書いた長編小説である『ペーター・カーメンツイント』（Peter Camenzind,

Berlin: S.Fischer,1904) も所蔵する。本書は 1904 年 2 月に初版 3000 部が刊行された。ペーターの彷徨と自己形成のこの物語は反響を呼び、1904 年の 7 月には早くも第 4 版、第 5 版が増刷され、2 年間で 3 万 6 千部、5 年間で 5 万部と言う成功を取めたという。

7・ヘルムート・シューマン書店からデカルトの『方法叙説』(1637 年・初版) 購入の経緯について

明星大学図書館が所蔵するデカルト著『方法叙説および屈折光学、気象学、幾何学』(1737 年刊) は、オランダのライデンで印刷された初版本 (78pp.; 1 leaf, 413, [1] pp., small 4 to) である。本書には、叙説と 3 つの論文があり、その論文の中には豊富な図解、例図がみられる。そして本書で注目すべきは、多くのページや欄外にペン字による書き込みが見られる。それはおよそ次のような種類に分類することができる。第一には誤植の訂正である。これはそれほど重要な意味はないと思われる。第二には、フランス語で書かれているフランス語の数行を欄外へラテン語に翻訳した箇所があり、そのラテン語訳は、1644 年のラテン語によるラテン語版初版本の文章と一致する。第三には、「屈折光学」について述べられている部分で、93 ページと 104 ページにはほぼ 20 行にわたって×印が記され、その欄外に別の文章が書かれている。この修正文は、1658 年のフランス語による第二版にはあらわれていないが、1668 年の第三版には記載された。デカルトは、1639 年 12 月 25 日の友人メルセンヌ宛ての手紙の中で、本書が刊行される前に誤った部分(93 ページと 104 ページ)に気づいたので取り急ぎその部分を削除し訂正した、という意味のことを述べている。このことから本書は、おそらくデカルト自身が訂正を施した本と思われる。そして第四の分類であるが、上記の 93 ページ、104 ページ以外にもデカルト自身の手によるとしか考えられない訂正部分が多く見られる。このように、本書ははじめて科学的に世界全体を考察し、その世界を客観的にみる主体としての「われ」とはなにか、その「われ」はどう生きるべきかについて思索を続けた、偉大な哲学者の最初の公刊本の初版である。と同時に、その著者自身となんらかの関わりがあるという、きわめて興味深い書物といえる。

そして、このデカルトの『方法叙説』第四部には、有名な命題、「私は思考する。故に私は存在する」についての見事な説明がなされていることも本書を所蔵する上での意義が大きいといえる。すなわち、哲学者としてのデカルトがこの有名な命題を生み出した背景には、次のような一つの論証がある。デカルトはまず、私たちは感覚的知覚によって世界と関わる場所から認識がはじまる、と述べている。その知覚は目覚めるにつれて、いろいろな印象が外から心のなかに入ってくる。光りの印象、音の印象、熱の印象、その他さまざまな印象が自分の心に働きかけてくるにつれて、世界が心のなかで姿を整えて現われてくる、と言える。(いわゆる「表象」と呼ぶ)

デカルトはそのような表象を前にして、一つの非常に典型的な考え方を打ち出した。「いったいこの表象、この意識の前に現われてくる世界の意味内容は、世界の実相を、世界の発展のプロセスを、本当に表現しているのか。それが本当に物それ自体をあらわしているという保証が、いったいどこにあるのか。そういう問いを立てるが、その答えは、勿論、理論的には出てこない。つまり、理論的に表象が本質をあらわしていると保証することができない、自分の眼前に存在しているあらゆる事物などが、本当に森羅万象を、他人を、あるいは自分自身を現しているのか、と考えるとき、デカルトにとっては、その問いは無限の懐疑を生み出す種にはなっても、そこから自分の認識の力を保証するものを引き出すことができないと考えたのである。デカルトは、このような無限の懐疑の海のなかで、彼はどこかに、ある確実な地点を探しださなければならなかったのである。そこから、デカルトは哲学者としてさまざまな思索を重ねていくことになった。そしてついに有名な一つの論証を見いだした。デカルトは、上述のような無限の懐疑の海に漂いながら、そのような懐疑が自分にとって何を意味するのかをあらためて考えた時、自分が思考行為をおこなっている時にのみ、懐疑が生じる。懐疑は思考によってのみ可能な体験内容なのだ。自分が懐疑に陥っているということは、自分が思考していることの現われに過ぎない。したがってどんなに疑問が自分のなかに雲のように湧き起るとしても、その無限の雲の湧き起るなかで、自分自身が思考活動をおこなっているという事実だけは、紛れもな

「方法序説」初版——邂逅から所蔵へ

——唯一の著者自筆訂正本——

1975年9月初旬、ロンドンよりチューリッヒに着く。バーゼルの Erasmus 書店で Auction の予約参加をすませて数日後、チューリッヒの Hellmut Schumann 書店を尋ねる。数種類の Rare-Books を注文し終えたところで、R. Descartes の「方法序説」の初版があると聞く。ところが、同じ初版でも値段が倍位の特別のものがあるという。現物を見てみたいと申し出ると、今 Bank に入っているとの返事である。Bank とは銀行かと尋ねると、あいまいな返事で、所在をはっきり説明してくれないが、やはり、日本と同じく、この業界は複雑なのだろうと想像する。

9月18日のこと、東京・雄松堂書店の新田社長がパリから特急で来られる前約であったので、早朝、中央駅に出迎え、同氏と一緒に隣りの小公国リヒテンシュタインの首都ファズツの Kraus 書店を訪ねる。さすがに、ヨーロッパ第一の広大な書物の倉庫、各種の Rare-Books や、バックナンバーの類が山と積まれている。ここで千点余の注文をして、前述のチューリッヒの Hellmut Schumann で聞いた R. Descartes の本の件を尋ねてみた。

その時初めて、事情が判明したのであるが、その本が実は、今ニューヨークの Kraus 本店に保管されているという説明であった。そこで、私は Kraus 本店に宛てて、26日夜開かれるアムステルダム、マリオットホテルでの Book Fair の招待会にその本を送ってもらうよう依頼した。名物の鹿肉の昼食をご馳走になった後、Kraus 書店の車でリヒテンシュタインから長駆チューリッヒの空港へ、(急ぎ新田社長は空路パリでの晩餐会へ向かわれた)そして私の宿舎セントラルホテルまで送ってくれた。

数日後、チューリッヒでの仕事をすませて、私はアムステルダムへ向かった。マリオットホテルでの Book-Fair は欧米、日本の本屋など60余り出店し、大変賑やかで、開会約30分後にやっと入場する始末であった。私は、Kraus がニューヨーク本店から送ってくれているはずの、例の Descartes の本が届いているかどうか秘かに案じていたが、実際に会場でその実物を提示された時は、一冊の小冊子とはいえ、いささか心躍る気持であった。

今、手にして見る Descartes の初版本、特に著者自筆の訂正がなされている、茶色の子牛皮装本(矯小四ッ折版)、“Discours de la Methode.”(1637)の、Front cover から Back cover へ、Back loose はないか、Main title から徐々に開く。「屈折光学」の章の p.93, p.104 と確かに、余白にフランス語による問題の長文の訂正加筆が行なわれ、このことは、彼が Mersenne に宛てた書簡(Dec., 25, 1639)によって知られている。それは1658年、フランス語版第2版にはみられないが、1668年の同第3版には入っている。また、その他の余白にもフランス語の一連の校訂があるが、これらはデカルトの自筆訂正であるとみなされている。

繰り返し何度も各頁を調べてみるが、にわかには是非の判断を下し難い。最後に私は、これを専門家に検討してもらうため、東京へ期限を付して送るように依頼をした。

さて今年の初め、雄松堂を経て、本学へ届けられたこの本に再会した。まぎれもないアムステルダムで手にしたあの時の本である。本学フランス文学の佐藤輝夫教授他数名の方に意見を求めると、諸氏の評されるには、問題もあると思うが、同じ初版でも全く唯一の貴重なものであるから、ぜひ購入の方がよいとの、皆一致した私と同じ意見であった。その結果、学長の決裁を得て、本学図書館所蔵とすることになったのである。にもかかわらず、実のところ、私は内心多少の不安をいだきながら新年を迎えた。しかし嬉しいことには、今春4月、ニューヨークの Kraus 本店を経て、著名な Bibliographer である John S. Keabian 氏および Arthur N. Culbert 両氏の署名入りの鑑定書が送られてきたのである。(M. K.)

い確かさで存在している、と考えた。どんなに懐疑によって思考の有効性を否定しようとしても、思考活動は疑う行為そのもののなかから、繰り返し意識の内部に立ち現われてくる。したがって、自分が思考しているかぎり、けっして単なる夢の世界のなかを漂っているのではなく、確かな現実のなかに立っているのである。思考行為そのものは夢の世界の出来事ではなく、存在の世界での出来事だ、という。そのようにして、有名な「私は思考する。故に私は存在する」という命題が生まれたのである。本書はその意味で貴重な資料といえる。

8・『リーナハルトとゲルトルート』初版から第四版までの出版の経過

『リーナハルトとゲルトルート』（全四部から成る）の初版は、第一部が1781年に刊行、第二部が1783年、第三部が1785年、第四部が1787年に刊行された。そして、ペスタロッチはこの小説をなお二度にわたって改訂し、新たに出版している。第二版では小説は三部（1790年～1792年刊）に分けられている。ペスタロッチは1790年から1792年にかけて出されたこの新版でもって、自らをオーストリー皇帝レオポルト二世に売り込もうと思っていたと言われる。

そして、『リーナハルトとゲルトルート』の第三版は1819年から1825年にかけて編集されたコッタ版の『ペスタロッチ全集』（全15巻）のうち第1巻～第4巻までに「リーナハルトとゲルトルート」の小説が収められている。

各版相互の内容の異動には省略したい。（ここで取り上げている“第四版”については何年に出版されたものを指しているか不明であるので、コメントをひかえたい。）

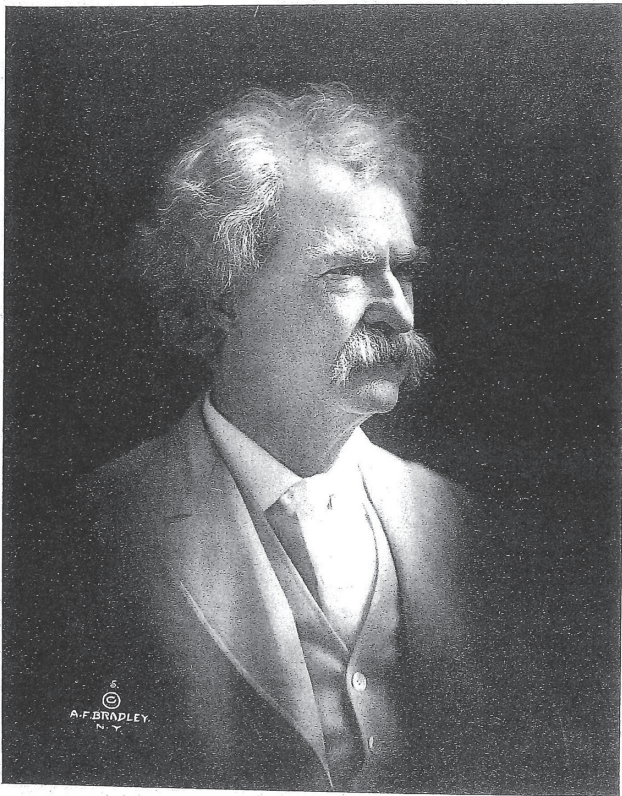
9・テオドール・リット (Litt, Theodor 1880-1962)

ドイツの哲学者、教育者。ボンとベルリンで古典文献学、歴史学、哲学を学ぶ。シュプラランガーの後任としてライプツィヒ大学教授。ディルタイ学派の精神科学的教育学、文化教育学を探究。『教育の根本問題——指導か放任か：Führen oder Wachsenlassen』（1927年）を著した。ライプツィヒ大学学長となり、保守的立場からナチスを批判、対決姿勢を示して自ら大学を辞職。哲学研究に没頭。その間、哲学的著『思考と存在』（Denken und Sein, 1948）、『人間と世界』（Mensch und Welt, 1948）を著す。第二次世界大戦後復職、東ドイツの体制を批判してボン大学に移り、教育学研究に専念した。彼の哲学的人間学は、精神的存在としての人間を主張し、自然主義的人間観を批判するもので、その教育学は、自然科学による陶冶と、〈世界観の多様性〉を肯定する〈寛容〉の精神を重視し、60年代の政治教育に影響を与えた。『生けるペスタロッチ』1952年刊。

10・マーク・トウェイン・コレクション（いわき明星大学所蔵）

このマーク・トウェイン・コレクション（2,916点〔3,126タイトル〕）は1987年のいわき明星大学開学と同時に所蔵することになった。このコレクションの内訳は、以下の通りである。

1. マーク・トウェインの著書類 891タイトル
2. 研究書、雑誌、新聞など519タイトル
3. 往復書簡、講演録など223タイトル
4. 写真、肖像画など65タイトル
5. マーク・トウェインと関係ある作家たちの図書や記事など887タイトル
6. マーク・トウェインと関係ある作家たちの書簡や写真類81タイトル
7. マーク・トウェインの書誌類およびカタログ類 128タイトル
8. 雑記類332タイトル



マーク・トウェイン・コレクションの一部

11・『源氏物語』の写本／『曾根崎心中』（甲南女子大学所蔵）

○『源氏物語』の写本（2点）について

その1・伝藤原為家筆『源氏物語』梅枝の巻 一冊 鎌倉時代中期書写

本書は鎌倉時代中期の後嵯峨院時代の書写と推定され、平安書写の『源氏物語』の写本が一冊も現存しないことからしても、非常に貴重である。残念ながら本書は表紙が失われている。表紙と見返しは江戸時代に付け替えられたもので、幕末の軍艦奉行「勝安芳」（勝海舟）の蔵書印がある。

その2・伝藤原為相筆『源氏物語』紅葉賀の巻 一冊 鎌倉時代後期書写

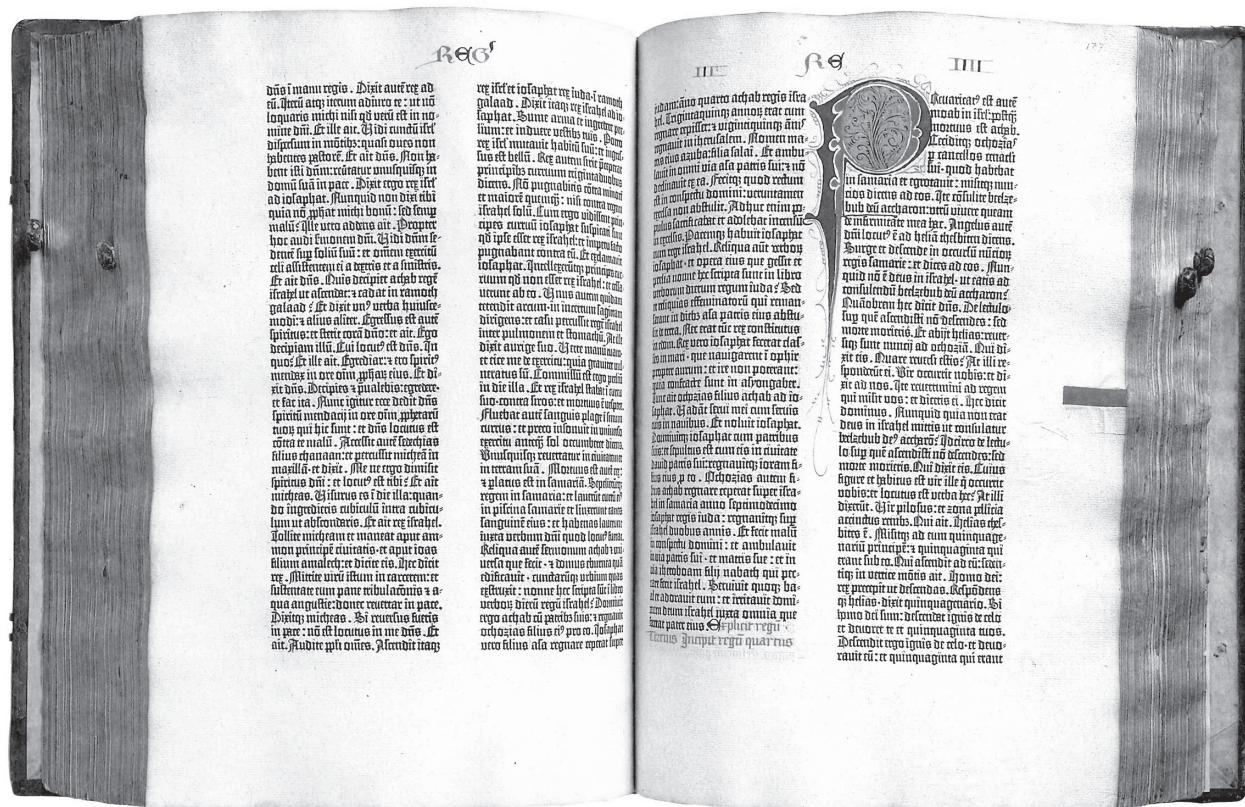
本書は『源氏物語』7番目の巻で、鎌倉時代後期の書写である。鎌倉後期の『源氏物語』写本も少なく、貴重な本である。表紙は、墨流しの料紙に金銀砂子・野毛散らし。

見返しは、金銀箔を密に蒔く。表紙・見返しとも、書写された当時のままの原表紙であり、珍しい。

○『曾根崎心中』について

近松門左衛門作『曾根崎心中』（人形浄瑠璃）は元禄16（1703）年に出版された1冊ものである。元禄16年4月、大坂曾根崎の森で起こった若い商家の手代と遊女の心中事件を取り上げて近松門左衛門が人形浄瑠璃として書き下ろし、大当たりを取った作品である。本書には、この浄瑠璃を語った筑後掾の7月28日の序文と作者近松の8月9日の序文が載っているのが特徴で、5月の興行の成功を記念して、山本九兵衛と山本九右衛門の相版元で出版された。しかも、唯一現存が確認されている六行本であり、従来から注目を浴びている貴重な版本である。

12・グーテンベルク『四十二行ラテン語聖書』の聖書について



1987年に日本に請楽された聖書「列王紀下」の見開きページ

グーテンベルク (Johannes Gutenberg 1397 ? - 1468)

15世紀の中葉、イタリアを中心に興隆したルネサンス（文芸復興）は、1453年ビザンチン帝国が滅び、西欧中世の暗黒時代からの解放、近世文化への夜明けを意味するが、この時代に発明された火薬・羅針盤・活版印刷術は、ルネサンスの三大発明として時代を画するものであった。そのうちの一つが印刷術のである。

印刷術の人類文化史の上に果たした功績は、計り知れないものがある。すなわち、すべての文化は印刷により、印刷物を通して伝えられ、普及され、知らされていった。その後の宗教改革、産業革命にも大きな影響を及ぼした。

ドイツ（マインツ）生まれのグーテンベルクが、鉛（鉛を主体としスズとアンチモンの合成）鋳造活字による活版印刷術を発明したといわれる。彼は印刷術を発明したとき、これによって文化や知識が速やかに発達するだろうという喜びと、悪書がはびこり、世の中を汚れたものにならないかと心配が心の中で交錯、一時はその公表をためらったが、ついに意を決し、いの一冊に「書物の中の書物」といわれる『聖書』（ラテン語）の印刷に踏切ったという、それが言うところの「グーテンベルク聖書」（1ページに2列、各42行を基本として印刷されたので四十二行聖書ともいう）である。グーテンベルクが『四十二行聖書』に用いたテキストは、聖ヒエロニムスのラテン語訳聖書である。

彼が用いた活字の書体は、当時マインツの教会などで使用されていたミサ典礼書のゴシック体に倣っている。ふつう欧文印刷には、大文字、小文字、数字、それに句読点などの約物（やくもの）や記物（しるしもの）が必要であるが、合計で八十種類ほどで足りる。しかし、グーテンベルクは『四十二行聖書』のために三百種類に近い活字を用いている。この理由はただひとつ、生身の人間が一語一語を手で写し、長い時間をかけて仕上げる中世の彩飾写本を、印刷した本で凌駕しようとしたからにほかならない。

この「グーテンベルク聖書」にはヴェラム刷りと紙刷りの二種があり、本文の総数は642葉、前者は大抵三巻、後者は上下二巻に分かれ、前者は25部程度、後者は140～180部程度印行されたといわれる。現在「グーテンベルク聖書」

を所蔵している国は、ドイツ 14 部（ヴェラム刷り 5、紙刷り 9）、アメリカ合衆国 10 部（ヴェラム刷り 3、紙刷り 7）、イギリス 8 部（ヴェラム刷り 2、紙刷り 6）、フランス 4 部（ヴェラム刷り 1、カム刷り 4）、イタリア 2 部（ヴェラム刷り 1、紙刷り 1）、スペイン（紙刷り 2 部）、他にオーストリア、ベルギー、デンマーク、ポーランド、ポルトガル、スイスが、紙刷り本を 1 部ずつ持っている。

外国では、一流の大学・図書館といわれるには、シェイクスピアの 4 つのフォリオ版全集（ファスト〔1623 年刊〕、セカンド〔1632 年刊〕、サード〔1663 年刊及び 1664 年刊〕、フォース〔1685 年刊〕）と「グーテンベルク聖書」を取り揃えることが一つの条件であるといわれている。児玉先生は、このことを目指すことが図書館充実には欠かせない条件であると常々ことあるごとに話されていた。その後、1987 年に日本にも「グーテンベルク聖書」1 部を所蔵（2015 年現在）することになった。

おわりに

以上見てきたように、この対談では、「大学図書館をどのように質の高い存在に育てていくかについての方針」、つまり、その方針の一つとして稀覯書という貴重な資料を集めることで達成したいとの願いが示されている。

児玉先生は、日頃から大学図書館は大学の心臓部に当たる部署として常に人類が何世紀にも亘って蓄積してきた学問文化の資料・原典を集めることが大学図書館の使命であり、それが取りも直さず明星大学図書館の質を高めることに繋がるのだと常に仰っておられた。言いかえれば、「稀覯書」(Rare Books, Collection) を集めることは、ひいては大学の大きな発展を期することになるとの大きな夢と確信をもっておられたように思う。このことは、「これらの収集活動は、明星大学図書館を、特色を持った、権威あるものにしたいという一念からのことである。」(「回想 教育と私」『教育の真理と探究』〔児玉三夫先生喜寿記念論文集〕 明星大学出版部 平成 5 年刊) とか、「(このような) 原典収集活動は、いわば私の図書館ひいては学校経営活動の一環である、と考えている」(同上) という言葉の中に端的に表れていると思う。

今や、先生が心血を注いで収集されてこられた資料群は、大学の貴重な財産となり広く諸大学の研究・教育界で活用されている。私はそのことを今は亡き先生にご報告したい気持ちでいっぱいである。

参考文献一覧

- The Daily Herald Library Collection Catalogue, 明星大学図書館 1974 年刊
- 『明星大学 20 年史』1984 (昭和 59) 年 10 月刊
- 『明星大学四十年史』2004 年 10 月発行
- ペスタロッチ著 梅根悟訳 『政治と教育——隠者の夕暮他——』(世界教育学選集 35) 明治図書出版 1974 年刊
- ペスタロッチ著 『政治と教育——隠者の夕暮他——』梅根悟訳 明治図書 1974 年刊
- 甲南女子学園創立 90 周年記念貴重書図録編集委員会編 『貴重書図録』甲南女子大学図書館発行 2010 年 11 月
- 高橋巖 『シュタイナー哲学入門——もう一つの近代思想史』角川選書 213 平成 3 年刊
- 『岩波 世界人名事典 (第二分冊)』岩波書店 2013 年刊
- Catalogue of Mark Twain Collection in the Library of Iwaki Meisei University 1987 published
- 貴田 庄 著 『西洋の書物工房——ロゼッタ・ストーンからモロッコ革の本まで——』朝日新聞出版 2014 年刊
- Helmut Presser: *Johannes Gutenberg in Zeugnissen und Bilddokumenten*. Rowolt, 1968.

おことわり

「ペスタロッチ」「ペスタロッチャー」の表記について。

「対談」「解題」ともに原文のまま用い、統一していません。